

意図の選言説と身体動作の選言説

氏名：鈴木雄大 (Yudai Suzuki)

所属：日本学術振興会 PD・専修大学

行為論の中心問題は、行為とは何かを理解しようとすることである。そのための一つのアプローチとして、行為の事例をそれとよく似た事例と比較し、両事例の違いを特定するというやり方がある。その典型例が、行為を単なる身体動作と比べるというアプローチである。たとえば挨拶するために意図的に手を上げることと、糸で引っ張られて手が上がることは何が違うのか。この問いに対して次のように考える道がある。前者の事例と後者の事例とでは、手が上がるという同じ身体動作が起こっている。両事例の違いは、その身体動作が起こる因果的来歴にあり、前者では身体動作は挨拶をしようという意図を原因に起こっているのに対して、後者では身体動作は糸で引っ張られるという出来事を原因に起こっている。このように行為を、意図によって引き起こされた身体動作として理解する立場は「因果説」と呼ばれる（欲求や信念も身体動作の原因に含まれるという考えはここでは無視する）。これに対して、行為における意図や身体動作の重要性を認めたとして、意図と身体動作の関係は因果的なものではないと考える立場は「反因果説」と呼ばれる。

本発表は反因果説を支持する。そのために、意図と身体動作の関係にまず目を向ける前に、そこで関係項となっている二つのもの（意図と身体動作）の理解を問いたい。まず身体動作に関して、上で挙げた二つの事例に関し、両事例では「手が上がるという同じ身体動作が起こっている」と述べたが、本発表はこれを否定する「身体動作の選言説」と呼ばれる立場を検討する。それによれば、意図的に手を上げる事例に含まれる身体動作と、糸に引っ張られて手が上がる事例に含まれる身体動作とは、異なった種類のものである。

また意図に関しても、身体動作に関してと同様二つの事例を比べることができよう。一つはすでに挙げた、挨拶するために意図的に手を上げる事例であり、もう一つは、挨拶するために手を上げようと意図したが、麻痺していたために手が上がらなかったという事例である。因果説は、この二つの事例に関しても意図を共通のものとして捉えるだろうが (cf. A. R. Mele)、「意図の選言説」と呼ばれる立場はこれを否定し、両事例に現れる意図は異なった種類のものであると主張する。

本発表は上記二つの選言説に関するより詳しい理解を示し、両者の関係 (ex. 一方から他方は帰結するか否か) を検討し、そしてそれぞれを支持する議論を与える。二つの選言説は行為論において未だあまり考慮されることが少ない立場であり、それらをもっともらしく描くことができれば、新しい行為観が開かれるだろう。